講演記録

西南学院創立前後のエピソード

金丸 英子

◇日本人の伝道は日本人の手で

西南学院の開学は、1909年に「宣教団」と呼ばれるアメリカ南部バプテスト連盟外国伝道局の日本事務所が、「1910年秋に福岡バプテスト神学校の建物を使って男子の学校を始めてよいか」という認可願いを本国に尋ねたことに遡ります。「福岡バプテスト神学校の建物」とは、現在の読売新聞西部本社の辺りにあったバプテスト派の牧師を養成する学校の建物のことです。福岡バプテスト神学校は、1907年に千葉勇五郎という日本人を校長に据えて始められた学校で、今で言う「専修学校」のような教育機関です。日本人にキリスト教を伝え、教えるのは日本人がもっともふさわしいという理由で、そのための働き手を養成するために始められました。しかし、最初からこのように土地や建物が備えられて始まったのではありません。その始まりは、宣教師が自分たちの住宅を開放し、私塾のようなものからのスタートでした。1893年頃のことです。宣教師たちは、拙い日本語で聖書やキリスト教の教理を日本人学生に教えましたが、それも宣教師と学生双方の時間の都合が折り合う時に授業が行われるといったものでした。10年ほどそれが続いた1903年頃になりますと、それに日本人教師が加わって、授業も定期的に行われるようになりました。

◇神学校開校の願い

この日本人教師は後藤六雄という人で、正規の神学教育を受けた人物で、当時横浜にあった北部バプテスト系列の「横浜バプテスト神学校」で神学を学んでいました。このことは何を意味しているかというと、その当時、南部バプテストの宣教師たちは、自分たちの活動のために正規の神学教育を受けた日本人の働き手をひとりも持っていなかったということです。そのため、同じバプテスト派ではありますが、本国のアメリカではほとんど接触をもつことのなかった異なるグループが作った神学校で勉強した日本人が福岡バプテスト神学校で教えたり、南部バプテストの宣教師と一緒に働く

などして、助けたのです。それから３年ほど経った1906年頃、宣教団は、この私塾を設備面でもっと整備して、全日制の神学校を誕生させたいと願うようになります。そして、本国に１万５千ドルの資金援助を要求しました。因みにこの年は明治39年で、ドージャー、ボールデン、ロウが日本に着いた年でもあります。

1906(明治39)年９月：来日したばかりのボールデン、ドージャー、ロウの三家族

◇宣教師、「身銭を切る」

全日制の神学校を作りたいという理由で本国へ１万５千ドルの資金援助を求めましたが、当時のお金でどれくらいの価値の金額に相当するでしょうか。当時の１ドルは旧円の貨幣価値で約２円の時代です。当時、急行の２等車が片道１円、米10kgが約１円弱、小学校教員の初任給が11円、上級公務員の給料が約55円の時代ですから、１万５千ドルは、当時の上級公務員の月給で約545ヵ月、つまり45年分の年収に相当する莫大な金額です。この要求はなかなか通らず、まるまる２年かかってやっと認められることになります。待っていた２年間、日本の宣教師たちは本国からの送金を待たないで、1907年に福岡バプテスト神学校を始めてしまいます。資金は、本国からの支援が来るまで、身銭を切って用意したのでした。

◇福岡バプテスト神学校の誕生

このように何もないところから始まった福岡バプテスト神学校でしたが、学生数も増えて順調に進められていた矢先、開校して１年半頃、先程のべた北部バプテスト系の横浜バプテスト神学校との合併話が出てきました。横浜バプテスト神学校の開校は1884年で、福岡バプテスト神学校よりも長い歴史を持っていました。合併の背景には、いくつかの複雑な要因があるのですが、それについては、2017年出版予定の『西南学院百年史』に記されることと思いますが、簡単に言いますと、狭い日本に同じバプテスト派の神学校が２つもいらないこと。合同した方が、経済的にも人的にも融通が利

いてよいことなどが理由として上げられました。この言い分は大部分、南部・北部の両バプテストの宣教師たちと、関東に多くいた北部バプテスト系列の日本人牧師たちから出たものでした。できたばかりの福岡バプテスト神学校と、すでに20年近い歴史をもっている横浜のバプテスト神学校の合同は何を意味するかというと、日本における南部バプテストによる直接的な教育事業が途切れることを意味します。

また、学生を福岡から遠く離れた横浜に持っていかれることは、地元の教会にとって大きな痛手ですので、福岡バプテスト神学校の日本人関係者は合併に大反対しました。当時、この種の案件は、関東と福岡の両バプテスト陣営の賛成がなければ進まない仕組みになっていましたので、神学校合併の決定が遅れることは、当時の日本のバプテスト派の活動全体に影響を及ぼすことに繋がります。しかし、福岡側は粘りに粘って反対の意志を取り下げません。しかし結局、1910年10月、２つの神学校は合同し、東京に日本バプテスト神学校という名称で開校される運びになります。形としては、福岡バプテスト神学校が閉鎖して東京に引っ越すことになりますので、福岡の土地・建物はそのままになります。

◇男子中学開校のビジョン

そこで、先ほどの本国南部バプテスト連盟外国伝道局へ「1910年秋に、福岡バプテスト神学校の建物を使って男子の学校を始めてよいか」という認可申請の手紙につながります。当時、福岡のミッションスクールと言えば、1885年に開学した福岡女学院だけでした。男子のミッションスクールは長崎の鎮西学院、熊本の九州学院だけで、福岡にはなかったのです。そこで南部バプテストの日本宣教師たちは、「もし南部バプテストが日本の少年のために学校を建てるとしたら、今が絶好のチャンスです」という内容の手紙を本国に送りました。この手紙は、宣教団の役職上、ドージャーが書いたものですが、この文章の直ぐ前に、「神学校に入る前に、自分達の学校で教育をする必要があります。これは日本においてとても重要なことです。」と書き添えられています。ドージャーら宣教師は、南北バプテストの神学校合併をそれほど悪くは思っていなかったようですが、送り出す前に、しっかりと自分たち南部バプテストの宣教師による宗教教育を授けてから送り出したいと考えていたようです。ですから、ドージャーらは自分たちの教育施設をつくり、教育活動をするという時に、単に日本の少年に一般教養としての教育を与える目的で学校の設立を願ったというよりは、日本におけるキリスト教伝道に従事する日本人牧師の輩出ということが根底にあったように思います。自分達の手によって宗教教育を強化し、中学レベルの教育を与えて、その後に神学校へ送り出したかったのです。

◇日本における教育事業

それにしても、なぜ「もしこれを逃したら、日本における南部バプテストの教育事業は先がない」というような、半ば相手を急かすような内容の手紙を送ったのでしょうか。それは、本国の外国伝道局が、横浜へ移転して空き家同然となった福岡バプテスト神学校の土地・建物を早い時期に売却したいと思っていることを宣教師たちが知っていたからです。同じ手紙にドージャーはこう書きます。「**そちらの資金繰りが厳しいことは、わたし達も知っています。しかし、だからといって土地・建物を売るというのは大きな間違いです。ここで行うべきことがあるのに、です。売るというなら、新しい学校の資金を作るために売るべきです。**」と、あくまでも自分たち南部バプテストによる教育活動の必要を訴えて止みませんでした。ところが本国の外国伝道局はこの申し出に首を縦に振りません。待ちこがれていた返事は、「**日本にそのような学校を始めることは、ベストだとは思わない**」という、失望させるものでした。理由のひとつは、県からの許可を必要とする学校を始めるには多額の出費が予想されたからです。その懸念を補強する役目を果たしたのが、当時、ちょうど滞米中であった福岡バプテスト神学校の元校長の千葉勇五郎です。千葉もその懸念に同意したのでした。

ところが、ここですごいのは現場の力です。ドージャーたち現場の宣教師は、その返事にめげるどころか、男子中学の開校がすぐには実現しないならば、諦めたわけで

1907(明治40)年10月：福岡バプテスト神学校開校記念（西公園）
（○印で囲んでいるのがドージャー）

はないけれども、それは一旦脇において、その代わりに空き家となった神学校の建物を使って夜間の学校を始めることにしました。これが、1911年２月１日に開校した福岡バプテスト夜学校です。結果的には、これが実質的に1916年の西南学院誕生に繋がります。

◇手弁当で始まった福岡バプテスト夜学校

福岡バプテスト夜学校は、今でいうところの夜間の語学学校で、英語と中国語を教えていました。学生たちは、昼間の勤めを終えた公務員や銀行員、学校の教職員で、授業は、土日を除いて毎晩行われ、安い授業料と宣教師を中心としたネイティブの教師陣を目当てに多くの受講生を惹きつけていました。中には遠く久留米から通う者たちもおりました。学生数は徐々に増え、開校した年の春には100人を超えるまでに膨れ上がりました。ドージャーの報告によれば、似たような夜間学校は日本各地で行われていましたが、その中でも福岡バプテスト夜学校は全国一の規模を誇ったとのことです。

宣教師が手弁当で始めた夜学校のセールスポイントは「ネイティブの英語」でしたが、開校してみると、宣教師の予想を超えて、学生の間にキリスト教に対する関心が高まっていました。開校当初から校長として働いたドージャーは、夜学校の真の目的は、あくまで「外国人宣教師とのふれあいを通して、キリスト教を紹介する」ことで、利益目的の語学学校経営ではないという態度を鮮明にしていましたので、この結果に満足したと思います。ドージャーは「キリスト教の影響を与えたい」と述べていますが、それは、日常的に宣教師と親しく交わることを通して、キリスト教を「人格的」に伝えたいという意味です。

その頃の時間割を説明しますと、月曜日から金曜日までの５日間のうち４日間は、毎晩25分間のチャペルが行われました。これは、現在の大学のチャペルと同じ時間の長さです。内容もほぼ同じです。注目に値するのは、経済的に厳しい運営を迫られていたにも関わらず、チャペル講話のために外から講師を招いていたという事実です。夜学校では、学生からは実費に相当する僅かな授業料しか取っていなかったので、これら外部講師に謝礼が払われていたとすれば、ここでもまたまた宣教師が何等かの身銭を切っていたことが推測されます。

◇旗を掲げ続ける

夜学校は順調に発展します。しかし、昼間は教室が空いていますので、夜までの間はいわば開店休業の状態です。そのために、婦人と女子青年のために昼間に新たなクラスを増やすことにしました。ということは、校舎は昼夜を問わず、一日中使用されていたことになります。このように宣教師たちの学校は順風満帆の中にありましたが、宣教師たちはそれで満足しませんでした。あくまでも最終目標は日本人牧師の養成でしたので、そのような中にあっても「全日制のミッションスクールの男子中学開校」という旗は決して降ろすことはありませんでした。ドージャーばかりではなく、他の宣教師も男子のミッションスクールの必要をアメリカの本部に次々に訴えました。ある男性宣教師は次のような手紙を書きました。

「福岡に男子のミッションスクールが必要です。信者となった青年や信者の息子たちが官立の学校に流れるのを防ぎたいのです。官立の学校は当然ながら、キリスト教的な雰囲気はありませんし、キリスト教を学ぶ機会もありません。万一、官立の学校へ行くようになったとしても、その前にキリスト教の精神に則って、青少年を教育してから送りだす必要があるのです。」

また伝道活動の現場から、自前の学校の必要を訴える宣教師もおりました。熊本で活動をしていたクラークという宣教師はこう言います。

「牧師の教育については、本国アメリカでは他の追随を許さないのに、ここ日本では他の教派に頼っている始末である。これは恥ずべきことではないか。」

◇開校の準備

宣教師たちは、必ずや本国の外国伝道局から認可が下りるとの確信を抱いて、男子中学校の全責任を誰に託そうかと考えていました。全宣教師の意見が一致したのは、実はドージャーではなかったのです。アメリカの神学校ではドージャーのクラスメートであり、1906年に一緒に日本に宣教師として赴任し、後に西南女学院の創立者となるロウに白羽の矢が立ちました。ロウは、一緒に赴任した3人の宣教師の中でもっとも年長者で、ドージャーの3歳年上にあたり、性格的にも温和で、異なる意見をよく聞いて人々をまとめ上げていく力をもっていました。しかしロウは、妻の病気療養の

ために帰国せねばならなかったため、そのお鉢がドージャーに回って来ることになります。もっともドージャー自身も宣教師として生活するうちに、異教の地日本でキリスト教伝道をするには、教育事業を興し、教育を通して伝道活動を行うことがかなり効果的であるという確信を徐々にもつようになっていましたけれども、自分が責任者になるなどとは夢にも考えなかったのです。そうこうしているうちに、1915年１月、ついに待ちに待った男子中学開校の認可が本国から到着します。校舎の建築費用として３万ドルの確約も取りました。

◇ロウの提案による「西南学院」

新しい学校を始めるためには、実にたくさんのことが決められなければなりませんが、その中でも重要なことは校名です。「西南学院」はロウの提案ですが、これには高い志が込められていました。当時すでに、東北には長老教会系の東北学院があり、神戸にはメソジスト系の関西学院がありました。西南学院は、その関西以西を視野に入れて「日本の西南地域をカバーする」学校になるのだという志がこもった校名でした。

宣教団は、ドージャーを宣教団側の代表として学校の経営責任を任せ、初代校長には、京都帝国大学を出て、中学の教員をしていたバプテスト教会の信徒條猪之彦（じょう・いのひこ）を迎えました。校長の月給は当時100円で、教員の２倍が支払われました。1915年当時、一戸建ての家賃が５円20銭で、小学校教諭の初任給が11円、サラリーマンの月給では、1927年になって、帝大卒の三井・三菱などのエリート社員の月給がやっと80円になったという時代ですから、相当の高給をもって校長を遇したことが推測されます。これは潤沢なアメリカの富によるものです。学校運営は理事会が行い、宣教師と日本人の理事が同数で理事会を構成していました。

◇ドージャー校長、走り回る

開校間もなく、かねてより健康面で優れなかった條の体調が思わしくなくなり、入院する事態になったため、校長の実務責任が全面的にドージャーの双肩にかかるようになります。以前から、病気がちの條を補佐して、場合によっては校長の本務であるような事柄にもたずさわりました。学校の場所は現在の場所ではなく、しばらくは福岡バプテスト神学校の空校舎を使いました。新しい学校の設備を整えなければなりませんので、視察のために近隣のミッションスクールの男子中学があった熊本と長崎に

何度も足を運びました。県の担当者、不動産業者、建築業者との話し合いが繰り返されました。採用予定の教職員の面談、体育館兼用のチャペルの建設、学生寮がありませんでしたので、近隣の下宿屋を個別訪問して西南生の下宿寮としてもらうための交渉、机、椅子、図書、教材の調達から夏冬の制服の色やデザイン、学校の校章まで、そのようにこまごましたそのすべてにドージャーは直接関わりました。今から考えると、これらのいくつかは校長の仕事ではないように思われるものもあります。しかし、ドージャーの学校における立場は宣教団側の責任者であり、本国からの資金の管理が主たる仕事でしたので、開校準備にお金が動く事柄については、直接関わることが求められていたからです。つまり、備品調達を含む事務関係の実務もこなしていたことになります。加えて、校長が不在でしたので、日本人の事務職員の指導や相談にも関わりました。

確かに、西南学院の開校はドージャー個人の夢の実現ではなく、日本における南部バプテスト派宣教師全員のそれでしたので、普通の意味でドージャーを「創立者」と呼ぶのは相応しくないかもしれません。しかし、以上のような開学に至る激務は、実質的に「創立者」としてのそれ以外の何ものでもありません。その意味では、ドージャーを「西南学院の創立者」と呼んで差し支えないと思います。ただ押さえておきたいのは、ドージャーは、当時日本で働いていた南部バプテスト派宣教師すべての夢を形にした人物であって、ドージャーという卓越した個人がおり、その個人の強い指導性によって、周りの宣教師や日本人を巻き込んで西南の誕生にたどりついたというプロセスではなかったということです。ドージャー自身も、他の宣教師も、そのよう

スクリーンを示しながら講演を行う金丸教授

なタイプのリーダーシップを求めていなかったと思います。学校はみんなのものですから、全体の総意として事柄を決め、それを特定の個人に託すという、「信頼と委託」のスピリットが西南学院を生んだと言っても過言ではないと思います。

◇「創立者」としての活動

西南学院は私立男子中学としてスタートしました。これは旧制中学で、その時代の日本社会においては「高嶺の花」的な存在でした。中学に進学する者は、それに続いて高校、大学を目指すエリートコースを歩みます。ですから、できるならば、みんな中学に行きたいのでした。もし中学受験に失敗すると、そのエリートコースから外れた人生を歩むことになります。そのために中学進学は熾烈を極めたことと思います。当時、福岡市には公立中学の修猷館一校があるのみで、福岡中学は、西南ができてから2年後に開校しています。ですから、そこに落ちると当時の学制に沿って、農業や工業関係の専門学校に多くが進学しました。繰り返しになりますが、中学入学は、旧制の高等学校受験の道を開き、帝国大学進学への道を開くものでした。地元では、「私立の男子中学を」という地域のニーズが高まっていました。ドージャーら宣教師はその地域のニーズを見事に捉えて、男子中学の開学を実現したことになります。第1期生の受験には118名の受験者がありましたが、この中には受験年齢を超えた者たちの願書もまじっていましたので、実際はこれ以上の応募者がいたことと思います。118名の受験者の内、わずか13名の不合格を出したのみで、1916年4月11日に、105名の第1期生が西南学院に入学します。この日、病床にあった校長の條は、この日のために病を押して出席し、12名の専任教員と100名を越す列席者を前にあいさつをしましたが、そこで次のように学校の創立目的を語ったと言います。

「この学校は、強く健やかな精神の涵養を目的として作られました。そのためには、キリスト教が必須であると、我々学校関係者は信じております。しかし、それは、諸君に『キリスト教を強制する』というものではありません。しかし、諸君がキリストを信じ、従う者となることを願っております。」

しかし條が執務のために学校に出向いたのはわずか3日だけで、病状は悪化し、結局7月には退職してしまいます。ドージャーはこれまで校長代理として学校運営に携わっていましたが、今や実質的に全責任を引き受けるはめになりました。ドージャーは自分がすでにオーバーワークであり、それによって体に負担が来ていることを自覚

していました。理事会は「校長は日本人で」という原則を変えていませんでしたので、手を尽くして後任を探すのですが困難を極めます。誕生したばかりの西南学院は、最初から向かい風に晒されたわけです。結局、開校初年度の終了間際に、理事会はドージャーを２代校長に任命し、ドージャーもそれを引き受けます。

西南学院は正規の中学として県から認可されはしましたが、敷地面積と施設面で若干の不足があったため、県からは「初年度に限り」という条件付きで開校を認められていました。施設面の不足は体育館で、「次年度まで不足している設備を準備しなければ、認可を取り消すとまで言われた」と、ドージャーは日記に記しています。そのために、本国の伝道局から資金を貰わねばなりませんが、次年度がせまる1917年１月になっても、２月になってもよい知らせは来ません。すでに、75名の第２期生の入学が決まっていましたので、学校は苦境に立たされます。ドージャーは日記を克明につける人だったので、当時の日記には本当に悶々とした心境がつづられています。どうにかお金を作り出して、土地と建物を得なければならない窮地に追い込まれていたのです。今のようにメールはありませんから、伝道局の最高責任者に手紙を書き、繰り返し窮状を訴えました。結局、その責任者がドージャーのそれらの手紙を携えて、南部バプテスト連盟の年次総会で一大アピールをした結果、信徒たちによる約６千ドルの寄付が寄せられ、敷地購入が可能になりました。西南学院の存続が可能になったのです。その日の日記には「重たい肩の荷がやっと降りた。これで、学校の将来は大丈夫だろう。」とありました。その後の西南学院の発展については、繰り返しになりますが、百年史まで乞うご期待となります。

◇エピソードから学ぶこと

このような学院創立前後のエピソードから私たちは何を学ぶでしょうか。それはまず、当然といえば当然ですが、西南学院は創立の時から、自らの教育理念をはっきりと意識しつつ、それを当時の社会のニーズと結びつける先見性を持っていたということです。つまり、自分たちが学校として何をしようとしたかということをはっきりと分かっていたということだと思います。創立者がキリスト教の宣教師ですので、最終目的には「日本人牧師による日本におけるキリスト教伝道」が掲げられましたが、その延長線上で、官立以外の男子中学校の設立を期待する社会のニーズをいち早く把握して、開学にこぎつけました。1915年１月31日にドージャーが本国宛に書いた手紙によりますと、ドージャーは西南開学のために、博多駅の駅長、福岡県庁の役職者、その他ビジネス界のリーダーたちと積極的にコンタクトをとって、地域のニーズの把握

に人一倍努めていたことがうかがえます。自己目的で学校を作ったのではなく、学校が何をもって地域に貢献し、何をオファーできるかということを、いつも頭に置きながら開学にこぎつけたのだと思います。

2つ目は、最初からすべてが整った中で船出したわけではなかったということです。なかなか本国から必要経費が届きません。施設の面でも1年間の猶予付きの「仮スタート」の状態で第1歩を踏み出さざるを得ませんでした。「ともかくはじめの一歩を踏み出した」形でのスタートでした。このような中で、ドージャーは実質的な「創立者」として八面六臂の働きをしましたが、決してドージャーは自分がそのポジションを望んだわけではありませんでしたし、誰もドージャーがそのポストに最もふさわしいとは思っていませんでした。最初は同僚のロウがドージャーのポジションに就くはずでした。校長職さえもドージャーが望んだものではありません。新約聖書のヨハネによる福音書に次のような箇所があります。

「あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへつれて行かれる」(21：18)

自分の思いとかけ離れたポジションへとどんどん行かされる中で、何がドージャーを支えたのかと考えると、それは彼が死の床で残したと言われる遺言「西南よ、キリストに忠実であれ」だったのではないかと思います。それに自身のあり様を結びつけて、「ドージャーよ、あなたはキリストに忠実で、キリストに誠実に生きて行きなさい」と、ひとりの人間として、信仰者として立とうとしたのではないかと思います。

「あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへつれて行かれる」。西南学院誕生後のドージャーの歩みは、この聖書の言葉どおりの生涯であったように思います。後年、父の足跡を辿るように西南学院に奉職したドージャーの息子エドウィン・ドージャーは、かつて父ドージャーの生涯を「神にあやつられた生涯」と表現したことがあります。「神にあやつられる」とは、日本語の響きとしてはあまりよいものではありませんが、言いたかった意味は「神に導かれた」ということでしょう。ドージャーの手紙や日記などの資料を読んでいくと、ドージャーは感情的で気の短い性格であったことが推測できます。そうであれば、教師としてもアドミニストレーターとしても、必ずしも「適任」とは言い難い面を持っていたかもしれません。ドージャー自身もそれを自覚し、そのような自らの不足を身に纏いつつ、

ドージャーなりの情熱と誠実をもって、西南学院に生涯を献げたものと思います。幸運だったのは、その情熱と誠実をサポートした人たちが、宣教師仲間ばかりか、当時の西南学院の日本人教職員の中にもいたということです。もちろん日本人教職員全員がドージャーのファンだったわけではありません。日曜日問題の責任をとってドージャーが退職したことからもそれは分かることです。しかし、確かにドージャーのビジョンを支えた人たちがいて、そこから輪が徐々に広がっていったのではないでしょうか。ひとりの傑出したリーダー・ドージャーがいて、西南学院ができたのではありませんでした。ことは、そんな形では実現できない。このことも西南学院誕生のエピソードから改めて学ぶことだと思います。

西南学院は100周年を迎えますので、百周年史編纂のために委員会ができました。そして、学院の様々な部署の、たくさんの方々に協力をお願いしています。多忙なご本務のある中でお願いしておりますので、心苦しくも思いますが、この事業は私たちの来し方を見るためであり、これから後に学院に来る方たちに伝えていく物語を残していくためでもあります。そのような思いでご一緒に百年史を作って参りたいと願っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

（2012年８月21日（火）：西南学院事務局職員夏期修養会、熊本県玉名市・司ロイヤルホテルにて）